

### 35 難治性創傷に対する高気圧酸素治療の有効性の検討

村上 豪 岡 治道 渋谷博美 古川雅英  
後藤公成 坂本佳祐里 池内裕也

(医療法人 敬和会 大分岡病院 高気圧酸素治療室)

【はじめに】当院は、平成16年2月より創傷ケアセンターを開設し難治性創傷の治療を行っている。難治性創傷は、動脈硬化を伴う血流障害が原因となることが多く、当院では、血流障害を伴う難治性創傷に、血管形成術(以下PTA)、血管移植術・血管バイパス移植術(以下バイパス術)、LDL吸着療法、補助治療として高気圧酸素治療(以下HBOT)を実施している。

【目的】難治性創傷に対する高気圧酸素治療の有効性の検討。

【方法】平成15年2月～平成16年6月までにHBOTを補助治療として実施した難治性創傷の患者44例、HBOTを実施していない110例の治癒率と治癒日数を比較した。

【結果】創傷処置とHBOTを実施した症例：治癒率65.2%・平均治癒日数64.3日、創傷処置のみの症例：治癒率52%・平均治癒日数96.7日。PTAとHBOTを併用した症例：治癒率92.3%・平均治癒日数92.4日、PTAのみの症例：治癒率23.1%・平均治癒日数105日。PTA・バイパス術とHBOTを併用した症例：治癒率66.7%・平均治癒日数154日。PTAとバイパス術の症例：治癒率66.7%・平均治癒日数395日。LDL吸着療法とHBOTを併用した症例：治癒率75%・平均治癒日数116.3日、LDL吸着療法のみの症例：治癒率42.9%・平均治癒日数126日。

【考察】難治性創傷にHBOTを実施していない症例と比較し、HBOTを実施した症例の方が、治癒率は高く、平均治癒日数は少ないという結果が得られた。

難治性創傷の補助治療としてのHBOTは、有効であると推察される。

### 36 急性増悪を来した放射線膀胱炎および腸炎に対する高気圧酸素療法

井上 治<sup>1)</sup> 小川由英<sup>2)</sup> 大城吉則<sup>2)</sup> 佐村博範<sup>3)</sup>  
久木田一朗<sup>4)</sup>

- |    |             |        |
|----|-------------|--------|
| 1) | 琉球大学医学部附属病院 | 高気圧治療部 |
| 2) | 同           | 泌尿器科   |
| 3) | 同           | 第一外科   |
| 4) | 同           | 救急部    |

【目的】女性生殖器系悪性腫瘍に対する放射線照射(照射)は血尿や膀胱瘻、下血やイレウス、腸瘻などを後発し、急性増悪を来して高気圧酸素療法(HBO)が適応となることも多い。根治手術後に照射を受け、HBOを行った過去16年間の52例を検討した。

【症例】すべて女性で、25～80歳(平均58)、原発は子宮頸癌37例、子宮体癌2例、詳細不明の子宮癌6例、陰癌3例、卵巣癌3例、尿管癌1例であった。放射線性膀胱炎(膀胱炎)は16例で、照射後3カ月～35年(平均11年)で発症し、放射線性腸炎(腸炎)は14例は照射後1カ月～30年(平均4年)で発症し、膀胱炎と腸炎の合併13例は同時発症が3例のみで膀胱炎が平均10年、腸炎が平均8年で発症していた。

【結果】膀胱炎単独では血尿14例中6例に膀胱タンポナーデを来とし、内5例は急性貧血に陥っていた。HBOを7～61回(平均21)行い、全例で血尿が消失し、貧血も改善したが、タンポナーデの3例で血尿が再燃した。膀胱・腸瘻の3例ではHBOを平均17回行ったが瘻孔の閉鎖は得られなかった。膀胱炎と腸管炎の合併では重症度とは関連は少なく、血尿11例ではHBOを平均26回行い、血尿は一時的に消失したが5例で再燃した。イレウス5例ではHBOにより一時的に改善が得られたが、多くは腸管の切除やストーマの造設の転帰となった。膀胱と腸管に生じた瘻孔3例ではHBOを最長60回まで行ったが完全閉鎖は得られなかった。腸炎単独例は卵巣癌で見られ、イレウス11例ではHBOを3～53回(平均28)行い、ほぼ全例で軽快したが、長期的には2例で反復し、5例で腸管の切除などが行われた。血尿を合併した下血は6例で3例が軽快したが一時的効果であった。

【結論】骨盤内の照射は放射線性膀胱炎と放射線性腸炎を惹起するが、後者はより重篤出、さらに合併例はHBOを行っても再燃を繰り返すことが多かった。血尿に対するHBOは再燃に際しても尿路変更を行うことなく多くは緩解が得られた。一方、イレウスや下血に対するHBOは一時的に緩解が得られても腸管切除などの根治術が必要となることが多く、瘻孔に対してはHBOの効果はほとんど期待できない。